第８分科会

ジェンダーから見る多文化共生～家庭を中心に考える～

●担当：西上紀江子（認定 NPO 法人 IVY 理事）、澤恩嬉（東北文教大学短期大学部准教授）
日野香織、粟野さとみ（山形県国際交流協会）
●講師：齋藤由美子氏（東北文教大学短期大学部特任准教授）
●協力者：渡辺敏（中国出身）、大野愛（ベトナム出身）阿部シルリー（フィリピン出身）、佐藤明美（韓国出身）
吉川恵（中国出身）、鈴木美羅（韓国出身）、中西夏暉（中国出身）
●分科会の目的：
・ジェンダーを理解し、自らのジェンダー観に気づく
・ジェンダー観が人間関係の築き方にどのような影響を与えるのかに気づく
・ジェンダーギャップがある環境の中で、文化的背景が異なる人々がより気持ちよく暮らすにはどうすればよいかを考える
●参加者人数：31 名

１．分科会内容と成果・結果

活動内容	詳細
ジェンダーを理解するワークショップ 講師：齋藤由美子氏	グループに分かれて自己紹介 ➢　住んでいる所、名前、今の気持ちを発表 ワーク１：「ある外科医の話」 ➢　ジェンダーを題材とした６枚のカードを辻褄があうように時系列に並び替える ・なかなか文章が作れないグループが多く、社会的地位の高い仕事＝男性という思い込みが根深いことがうかがえた。 ワーク２：「ジェンダー役割のマトリックス」 ➢　１０種類の仕事を女性・男性/Sex・Gender のマトリックス表に分類する Sex：生物学的なものとみなされる男女の違い Gender：社会的・文化的に作り出された男女の違い ・ジェンダー役割は思い込みが強い＝変えることは難しいが、実際には時代や個人により違いがあり、変化させうることに気づいた。 ・あるイスラム教国の地方では女性は外出しないので買い物もしないし、下着は男性が買うという事があるように、社会・文化・宗教によって位置づけが変わってくる。 ・文化（ジェンダー観）が違う人と暮らすのはどのような問題（課題）があるのか。
パネルトーク 進行： 西上紀江子	Q 本国で抱いていたジェンダーのイメージ 渡辺さん：親の姿を見てジェンダーを学んだ。共働き。家事分担。中国では自分ができることはやるのが当たり前だし、奥さんの友人には夫が料理をふるまう。 大野さん：ベトナムでは家事は女性がやる。幼いころ母親が娘に教える。男性は家を出た後

渡辺敏（中国出身） 大野愛(ベトナム出身)	に徐々に覚えていく程度。ジェンダー観は大人になってから変わった。産休に入ったら自分の担当する仕事がなくなっていたという話も聞いたことがある。 Q 来日後夫婦または家族の役割分担で驚いたこと・悩んだこと 渡辺さん：日本では夫の両親と同居。夫と義父は「ごはん」「おかわり」など指示するばかりで全く動かない。夫がごはんのおかわりの時茶碗を自分のところに持って来たのには驚いた。No と言えないことが辛かったし、頼まれることがとてもストレスだった。嫌なことだったので、自分でしないと決めた。当初は私の代わりに義母が動いていたが、今では私のよき理解者になっている。現在では夫が料理や皿洗いをしてくれるようになった。 大野さん：共働きで夫は家事に協力的だが、日本社会では子育ては女性がするものという考えが強い。熱が出た子供を夫が迎えに行ったが、夫に迷惑をかけている気分になった。もう少し働きやすい社会になってほしい。
グループ ディスカッション 進行：澤恩嬉	※５～６名×７グループ(グループ毎に外国出身者を配置) 1.性別による役割分担に関する事例の共有 ・平日と休日で家事の分担がかわる ・夫は結婚当初から自分でお茶も入れない。今もそうだ ・単身赴任のため別居した時、お互いが家庭でいかに貢献していたか実感した 2.理想に近づくためにできることは何か ・子供や夫の家事能力を育てること ・家族で話し合うこと
決意表明とシェア	今日から自分が具体的に取り組むことを書き、他の参加者の決意を共有する 参加者の決意・取り組み ・思いやり　心を柔軟に ・夫をほめる　ラインに❤をつける ・自分の考えを押しつけない ・自分が我慢しない、また相手にも我慢させない。話し合って解決する。 ・ジェンダーの概念にとらわれず視野を広める ・感謝を忘れない ※ジェンダーへの気づき・思い込みについて改めて知ることによって気づきが生まれ、また在住外国人との意見交換の場となった。
お茶会	交流会：アンケート記入、ＡＩＲＹ紹介など。

２．使用した教材や参考資料

参考資料

・『地球市民を育む学習』グラハム・パイク.ディヴィッド・セルビー共著　明石書店

・「ジェンダー役割のマトリックス」は「青年海外協力隊帰国女性隊員の会　WAA」作成

３．参加者アンケート

参加者のご所属などについて(N=29)

教職員(小・中・高・大学)	公務員	国際協力交流団体	民間企業	中学生	高校生	大学生	その他
4	0	8	2	0	8	2	5

参加者の年代について(N=30)

10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
10	2	2	5	6	5

参加者のこれまでのフォーラム参加回数について(N=31)

初めて	2回目	3回目	4回以上
18	2	2	9

参加者の分科会への満足度について(N=31)

大変満足	満足	普通	あまり満足できなかった	不満足
25	6	0	0	0

4．担当者所感

【齋藤由美子（東北文教大学短期大学部)】ワークショップ講師

・様々な年代やルーツの人たちと一緒にワークショップをしたことで、多様なジェンダーの姿や意見を共有することができ、改めてワークショップの面白さを実感しました。ありがとうございました。

・参加者が大変積極的で、活発なワークとなった。

・男女数等、グループ編成にあと少し工夫があると尚よかった。

・時間配分は難しい。課題です。

【西上　紀江子（認定 NPO 法人 IVY 理事)】

・ワークショップ、インタービューとも時間が足りなかった。

・グループ分けが当日になってしまい、男性がかたまってしまったり、いつものメンバーが同じになったりしてしまい、前日にやり取りしておくべきだったと反省。

・ボランティア学生、協力者と WS についてもう少し綿密な打ち合わせをしておくべきだった。

・協力者が中国人・韓国人が多かったので、もっと多様な国の方に声がけしたい。

・チラシ等を置くコーナーを設けても良い。

【澤　恩嬉（東北文教大学短期大学部)】

・特に大きなトラブルなく終了できた。参加した方々は WS をはじめ、グループディスカッションにも積極的に楽しく参加していただけたのではないかと思う。グループで話し合われたことを全体でも共有できればなお良かった。

・ジェンダーというテーマだったので、できれば男女のバランスも考えてグループ分けをしたら、より活発なグループワークができたのではないかと思う。

【粟野　さとみ（山形県国際交流協会)】

・参加者の世代が 10～60 歳以上と世代が幅広く参加していただいたことが意外だったが、多くの方に興味を持っていただいたのはとてもよかった。参加者人数は来年見直すところだ。

・笑いあり、学びありの 2 時間半でグループ内では活発に意見が交わされるなど、賑やかな分科会になった。

【日野　香織（山形県国際交流協会)】

・進行は概ねスムーズであったと思う。

・講師が行う WS の内容を担当者が事前に把握しておけばよかった。

（どうサポートできるか心構えを持つことができるので）

・ワークショップで実践できる人数はあの程度が上限ではないか。